

# 最高の人生

林田 緋紗子

私は、春が嫌いだ。なぜかというのと、どうしても嫌なことを思い出すからだ。ちょうど、一年が経ったので、書こうと思った。書いておかなければ、いけないと思う。一年前、私は恋人に別れを告げられた。それは、突然の出来事で、理解のできない理由からであった。そんな理由では納得ができない、と思った。というのも、二十年間も生きてきて、相手が自分の体のこともよくわかっていないような人間であったからだ。

生きている以上、恋人という関係上、性の関係になることはあり得るが、私はそれが全てだとは、思わなかった。心で繋がればいいと思っていた。

しかし、それは悪魔でも私の考えであって、彼の考えとは違ったようだった。納得がいかないと何度言っても、もう一度会って話したいと何度言っても連絡をよこもしない、電話を出ることさえもしない。そういう人間だった。私の愚かな点はその時点でその男を見限ればよかったのに、それが、できなかった。

元に戻ることができ、なんて幻想は捨てればよかったのに、と今でも思う。それから数日が経ち、友人の力添えもあって、なんとか連絡を取ることができた。しかし、彼の言葉から発せられたものは私の心をボロボロにするには十分のことであった。納得できないから、どうした。こんなことになるならお前に告白なんてしなければよかったと心の底から思うといわれたのだ。

どうすれば、どう生きてきたら、そんな残酷な言葉を軽々しく、しかも自分がかつて好きだと思っていた人間に言えるのか。驚きが隠せず、涙も隠せず、友人たちを心配させる事態になってしまった。

理不尽な理由で別れることなんてよくあることだろうといわれたのだが、私には到底理解ができない。自分の体の不都合で、そういった性の関係が持てないから別れようなんて、それなら最初から告白しなければよかったじゃないか、と思うばかりであった。二十年間も生きてきて、本当にわからなかったのか。私は今でも、そのことをたまに思い出し、悔しいと感じる。

いっそ、お前のことがもう好きではなくなったといわれたほうがよかったと思う。

確かに、その時点では激しく傷つくだろうが、いつかは立ち直れることであるからだ。いつかは忘れられるものだ。しかし、そのようなことをばっさりといわれ、もともと弱かった私の心が耐えられるはずがなかった。

それからの私の転落ぶりは凄まじいものであった。私は、その相手と同じサークルに入っていたのだが、彼の顔を見る限り、彼は辞める気配などなく普通にサークルにも来ていたようだったので必然的に、私が辞めることになった。それは、私が決めたことだ。誰が悪いというわけでもない。

先輩方には、なにも話さなかった。ただ、体調が悪いという、その一点張りで辞めた。きつと、先輩も不思議に思ったに違いないが、彼のことを考えると、彼はサークル以外に友人や居場所がないようだったので、サークルという居場所まで奪うのは流石に罪悪感を覚えた。ここまで傷つけられてもそんな思いは、私にもあったようだ。

しかし、辞めてそれで終わり、というわけではなかった。私の心はズタズタになり、戻る見込みがなかったので両親と話し合い、心療内科に行くことになった。初めての心療内科。きつと行かない人は一生行かないであろう、心療内科に。

カウンセリングも、精神安定剤も初めてだった。カウンセラーの方は親身になって私の話を聞いてくれたし、これからどうやっていったらいいのかという話までしてくれた。初めて飲んだ精神安定剤は体が受け付けなくて、トイレで何度も嘔吐した。初めてだった。トイレで座り込んで泣いたのは。

そういった初めての多い年だった。

しばらく、そういう日が続いた。安定剤に体が慣れてきたころ、私はカウンセラーの方にきつともう大丈夫だという言葉を送った。また、もしも辛いことがあったらまたおいでといわれて、私はその言葉を信じて、通院を止めた。相変わらず、安定剤は飲んでいたが。

大丈夫だといわれたのはちょうど夏。なにもなく、私はただ無気力な日々を過ごしていた。大丈夫だといわれても、私はどこかで虚無感を覚えていた。家から出ない。出られない、そんな毎日だった。

それを心配した父親に勧められ、次に私は自動車学校に通うことになる。まさかそれが、私の精神状態をもっとひどくすることになるとは、わかっていなかったのだが。

安定剤を飲んだまま、車を運転することは禁止されているので、飲むのは止めた。今思えば、それがひどくなる原因だったのかもしれない、と思う。

ああいう薬は突然止めてはいけないみたいなのだ。少しずつ減薬して行って、それから止めなければいけないようだったが、私は突然止め、車に乗り込んでしまった。仮免までは何とか取れた。しかし、実際に外を運転することになったときに私は直感で思った。

「死ぬ！」  
と。

外をいきなり運転することが怖い、なんてことは誰にでもありえることだとは思う。だが、私の中のそれは尋常ではなかった。ずっと、怖い、怖いと思いつながら運転していた。そんな人間が上手く運転なんてできるはずがない。

小さな声で、教官に聞こえるか、聞こえないかぐらいの声で「死にたい」といったこともあった。おそらく聞こえていないと思うが。聞こえていたら大変だ。たぶん、車を降ろされていたと思う。

死にたい、死ぬ、怖い、そんな思いばかりが先行して、自動車学校に行くことイコール死ぬことという風に思ってしまった、私は自動車学校に近寄れなくなった。今、住んでいる家から歩いていける場所にあるのだが、その近くを通ることができなくなってしまった。怖い、と思うからだ。

大丈夫だと思っていた精神状態も自動車学校に行かなくなり始めたあたりからだんだんと、また悪くなってきた。バイトも始めてみようと思って、派遣のバイトを試してみたのだが全く続かず、派遣会社からのメールがメールボックスに溜まるばかりの毎日を送っている。

これはやばい。私の長くもない人生の経験がなにかをいっていた。

「違う病院に行く」

私は母親にそう告げて、家から行きやすく、評判も良さそうな病院に行った。こういう病院を予約するときに、いつも思うのだが初診の人間は予約が取りづらい。次々と心療内科に電話をかけながら私は、予約がいっぱいになるほど現代の日本人は心を病んでいて、それでも普通に生きなければならぬという気持ちで普通を装っているのかと、少し切なくなつた。

そんなことを考えながら、なんとか予約が取れた病院に行くことになり、医師に

色々と話すと適応障害及び不安障害の疑いがあるかもしれないといわれた。

適応障害、といわれてもという気持ちだ。適応できてないのか、私は、と思いなから話を聞いているとサークルを辞めたときにいざこざがあったそれが原因で今、学校という場所に適応できていないのではないか、人が怖いと感じるのはそのせいではないのかというものであったのだ。

そう、私は車を運転するのも死ぬと思うほど怖かったが、学校や人ごみの中を歩くのも同じぐらい怖いと感じるような人間だった。

それでも、カウンセリングを受けたおかげで少しずつ良くなるようになっていた。きつと、高校生のときの私はこんな事態になるなんて予想もしていなかった。う。想像していた人生と私の今の人生は全く違う方向へと進んでしまった。

ただ、良い意味で、予想していた人生とは違う面もあった。それは、大学での友人たちに出会えたことだ。高校生のときの私は友人と呼べる友人はあまりおらず、いたとしても上辺だけの関係の友人だった。群れみたいなものだ。学校という社会から追い出されたくないための群れ。

しかし、大学で出会えた人たちは、本当に、私が苦しい思いをしていたときに、同じように苦しんでくれたし同じように悲しんでくれたし、私以上に怒ってくれていた。そのとき、私はこの学校に入って、人が怖くなってしまったけれど、でも、それでもこの人たちに会えて良かった、友達になってくれてありがとうと思ったのだ。

私は友人たちに支えられて生きている。本当に優しい人たちに出会えたのだ。

あの人たちがいなくなったら、私は今頃、死んでいたかもしれない。独りで虚無感や恐怖と戦えず、自殺をしていたかもしれない。

だから私は、こんな人生でも生きていてよかったと思えるのだ。自動車学校も卒業できない、学校にも行けないようなこんな私ではあるけれど大切な人たちに囲まれて生きている。私は、幸せな人間だ。苦しくて、家から出られない日もある。人が憎くて仕方のない日もある。しかし私は大切な人たちがいてくれるから生きるこ  
とができる。

私の人生は他人から見たら辛い人生に見えるかもしれないが、それでも、大切な友人、家族と過ごすことができるから、励まされているから最高の人生だといえるのだ。